

An integrative theory of intergroup contact.

集団間接触の統合理論

Brown, R., and Hewstone, M., (2005) An integrative theory of intergroup contact. In M. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 37, pp. 255-343). New York: Academic

Rep. 小森めぐみ¹.

Table of contents

I.	Introduction (導入)	256 (2)
II.	The Contact Hypothesis and Its Early Modifications (接触仮説の説明と早期に行われた変更について)	258 (3)
III.	Theoretical Developments of the Contact Hypothesis (接触仮説の理論的な発展)	261 (6)
A.	The Brewer-Miller Decategorization Model (Brewer-Miller の脱カテゴリー化モデル)	262
B.	The Gaertner-Dovidio Common In-group Identity Model (Gaertner-Dovidio の共通内集団アイデンティティモデル)	264
C.	The Hewstone-Brown Intergroup Contact Model (Hewstone-Brown の集団間接触モデル)	266
IV.	Experimental Studies of the Impact of Stereotype-Disconfirming Information: A Cognitive Analysis of Contact (ステレオタイプ不一致情報の影響の実験的検討: 接触仮説の認知的分析)	267 (3)
V.	Experimental Studies of Group Salience (集団の顕現性の実験的検討)	270 (5)
A.	Limits To The Importance Of Typicality (典型性の重要性のもつ限界)	273
VI.	Correlational Studies Using Group Salience as a Moderator Variable (調整要因としての集団の顕現性の相関的検討)	275 (9)
A.	A Methodological Caveat (方法論の注意点)	277
B.	Empirical Evidence For Salience Moderation From Surveys (顕現性の調整説を支持する調査研究からの実証的証拠)	278
C.	Summary Of Moderational Evidence (調整要因研究まとめ)	282
VII.	Mediators of the Effects of Contact (接触の影響の媒介要因)	284(25)
A.	Cognitive and Affective Mediators (認知的・感情的調整要因)	284
B.	Intergroup Anxiety as a Mediator of Intergroup Contact Effects. (集団間接触効果の調整要因としての集団間不安)	285
C.	Additional Negative and Positive Mediators of Contact Effects. (接触効果への正/負の追加的調整要因)	292
D.	Simultaneous Moderation and Mediation (調整と媒介の同時生起)	302
E.	Summary of Mediation Evidence (媒介的な証拠の要約)	308
VIII.	Evidence from Educational Settings (教育現場からの証拠)	309 (6)
IX.	Acculturation Orientations and Intergroup Attitudes (文化変容志向と集団間態度)	315 (2)
X.	Toward an Integration (統合にむけて)	317(29)
A.	Intergroup Contact Theory: Progress and Priorities (集団間接触理論: その進歩と優先事項)	318
B.	Theoretical Integration: Intergroup Contact, Personalization, and Common In-group Identity. (理論的統合: 集団間接触、個人化、共通内集団アイデンティティ)	326
C.	Conclusions (結論)	329
XI.	References	331(15)

¹ 一橋大学大学院博士課程.

I. Introduction (p. 256)

- 21世紀がはじまって間もないのに、国同士の紛争やテロリズム(e.g., Afghanistan, 2002; Iran, 2003; Spain, 2004; USA, 2001)、イスラム恐怖症や反ユダヤ主義(e.g., Allen & Nielson, 2002)、難民への迫害(e.g., MORI, 2003)などは増加する一方
- 本稿では、これらの問題の解決に社会心理学ができる貢献として、偏見低減や集団間の好意的な態度、ステレオタイプの形成に集団間接触が及ぼす影響に注目する
- この分野での重要文献としてAllport(1954)の“**接触仮説**(contact hypothesis)”がある。
- この50年の間に接触仮説は理論的・実証的に重要な発展をとげた。
 - Brewer and Miller(1984)の**脱カテゴリー化**(deategorization) **モデル**
 - Gaertner and Dovidio(2000)の**共通内集団アイデンティティ**(common in-group identity) **モデル**
 - Hewstone and Brown(1986)の**集団間接触**(intergroup contact) **モデル** ←著者
 - Pettigrew(1998)の**長期的接触理論**(theory of longitudinal contact)
- 本稿では、著者たちのモデルを批判的に検討する。このモデルはBrewer and Miller(1984)やGaertner and Dovidio(2000)と矛盾するが、研究の蓄積により矛盾は解決可能(後述)

本章の内容

- まずAllport(1954)の古典的接触仮説を説明し、最近の横断的・縦断的研究や実験研究、メタ分析を通して、Allportの知見が今なお証明され続けていることを示す
- 次に、カテゴリー化に注目して接触仮説の知見を発展させた最近のモデルを検討。
- 次に著者たちのモデルを説明。
 - 接触が起きた文脈を越えて態度や行動の変化が**一般化**される時の**どんな状況か**を検討。
 - 特に**集団の顕現性**(Group salience; **集団のメンバーシップがその文脈で心理的に‘存在する’程度**)が、接触と改善された集団間態度の調整要因として働くことを示す。
- 本章の大部分ははさまざまな接触状況から蓄積された知見のレビューで、そこから仮説を評価する。そしてよりすんだ目標としては接触と改善された集団間態度の媒介要因を検討
- 最後に、諸モデルの統合を図り、Pettigrew(1998)が行ったモデルの統合と比較

各セクションの構成

- II. 接触仮説関連の研究のレビュー
- III. 1980年代に行われた接触仮説の発展。著者たちのモデル含む
- IV~IX. 著者たちのモデルをもとに行われた実証研究のレビュー
 - IV. 接触状況で起こりがちな、不一致情報接触時のステレオタイプ変化についての研究
 - V. 集団間の顕現性を直接操作した実験研究。これは著者らのモデルの中心的主張を検討
→集団間の顕現性が維持されている時のみ態度変化の一般化が起きる
 - VI. 多様な文化状況で実施された、**相関研究のレビュー**。調整要因としての顕現性を検討
→高すぎる顕現性は集団間不安を高め、それは**非好意的な集団間態度**につながる
(Stephan & Stephan, 1985がすでに指摘したとおり)
 - VII. 感情測定や潜在態度を含む、**接触の結果に不安や他の情動が及ぼす媒介的役割**に注目
 - VIII. 著者たちのモデルを**教育現場**で検討
 - IX. 多元的な社会における**民族集団の文化変容研究**の検討
- X. 最近の進歩と、蓄積された研究にもとづく諸モデルの統合

II. The Contact Hypothesis and Its Early Modifications. (p. 258)

- Allport (1954)は、同じ地位にある集団の成員が、協力的な相互作用(友人となる可能性を含むような; Cook, 1962)を通じて共通の目標を追求することで偏見が低減すると主張。制度上の権威がこの接触をサポートしていることも必要とした。
- その後行われた多くの研究はレビュー(Amir, 1969; Amir & Katz, 1976; Hewstone, 1996; Hewstone & Brown, 1986; Pettigrew, 1998; Schofield, 1995)、メタ分析(Pettigrew & Tropp, 2004)されており、いくつか矛盾する研究はあるものの、主張の核心は実証的な支持を受けている (see Forbes, 1997; Hewstone & Brown, 1986; Stephan, 1987)。

メタ分析からの知見

- Pettigrew & Tropp (2004)は 250,000 名が参加した 500 の研究をメタ分析した。
 - 接触自体の偏見低減に与える影響はそれほど大きくはなく、($r=-.20$)、Allport が “最適” とした条件があてはまる場合、影響の効果サイズは増大する ($r=-.30$)。
 - たとえば接触で外集団と友情が育まれた場合はそうでない場合よりも効果サイズは増加

横断的研究

- Hamberger & Hewstone (1997)はヨーロッパ四ヶ国から確率抽出したサンプルを用いた調査を実施。
 - 外集団(他ヨーロッパ国)との接触の種類(友人/職場の同僚/隣人)が、少数民族への露骨な偏見に及ぼす影響を検討した。
 - どの接触も偏見とマイナス相関を示したが、中でも友人としての接触の影響が最も強かった。
- Hewstone, Cairn, Voci, Hamberger, and Niens (2004)が北アイルランド在住のカトリックとプロテスタントに対して行った研究では、相手側の友人、親戚、隣人の数が多いほど、統合学校への態度がポジティブだった。

縦断的研究の例

- 因果関係の問題を考慮して、最近では縦断的な手法がより頻繁に使われるようになっている
- Maras and Brown (1996)は障害児と健康な子供の3ヶ月間交換プログラム(半数が週に一度相手校へ行き、半数は統制群としてとどまる)を通じて、健康な子供の障害をもつ子供への態度を検討。
 - 接触は、子供同士の協力活動を含んでおり、先生達のサポートや励ましの下で行われた。様々な種類の障害の性質についての議論がすすんでおり、カテゴリーは顕現的だった。
 - 交換プログラムに参加した子供は障害児への好意を増加させ、統制群にその傾向は見られず

まとめ

- Allport の主張どおり、正しい条件下での集団間接触は、ポジティブな集団間態度や行動を導く。
- しかし、これまでの研究では一般化の問題に答えられていない
 - 特定の個人→集団全体、特定の外集団→それ以外の外集団、一度の接触状況→別の接触状況、一つの次元→別の次元など、変化の一般化を促進する条件はまだわかっていない(Pettigrew, 1998; Vivian et al., 1997)。しかし、政策立案などにおいてこの問題は重要
- また、接触が変化をもたらす際の社会心理学的プロセスも未解明。
 - プロセスが明らかにならなければ、偏見低減の試みはその場しのぎのものになってしまう。

III. Theoretical Developments of the Contact Hypothesis (p. 261)

- 1980年代に少なくとも3つの新しいモデルが提唱された。
 - Brewer and Miller(1984)の**脱カテゴリー化モデル**
 - Gaertner, Mann, Murrell, and Dovidio (1989)の**共通内集団アイデンティティモデル**
 - Hewstone and Brown(1986)の**集団間接触モデル**
- どれもTajfel and Turner(1979)の社会的アイデンティティ理論をベースにしているが、協力的接触がその場あるいは一般化された集団間態度を改善することについては結論がわかれる
 - 様々な集団への所属(membership)は自己概念に取り込まれて社会的アイデンティティを形成
 - 特定集団への所属やカテゴリー化の次元が顕現化すると、集団間の区別や集団内への同化がすすみ、必然的ではないものの、通常は内集団びいきが生じる(Tajfel & Turner, 1979; Brewer, 1979; Hewstone, Rubin, & Willis, 2002; and Mullen, Brown, Smith, 1992)

A. The Brewer–Miller Decategorization Model (p. 262)

- Brewer and Miller(1984, 1988; Miller, 2002)は、接触は社会的カテゴリーの顕現性を低め、より“対人(interpersonal, ⇔ intergroup)”モードで試行、行動ができるようにするものと主張
- 上記の主張にあたり、Brewerらは個人特有の特徴を片方の極、集団への所属をもう片方の極とする心理的な連続体を仮定した。(←Tajfel, 1978; Brown & Turner, 1981を改善したもの)
- 対人モードまたは脱カテゴリー化的接触の目標は、外集団メンバーの**差異化**の増大と**個人化**²。
- 個人化された相互作用は当該集団のメンバーとの将来の相互作用に、カテゴリーアイデンティティが使えるかという情報を提供するため、一般化されやすい。(Brewer & Miller, 1984, pp. 288–289)。
- Allportの呈示した条件は、脱カテゴリー化、個人化を通して偏見低減に貢献するとも主張
- 脱カテゴリー化モデルを支持する知見は3種類。
 - 交差カテゴリー化の効果の研究。複数のカテゴリーが重なる場合、そのどの次元においても内集団バイアスは見られなくなる(レビューはCrisp & Hewstone, 1999; Migdal, Hewstone, & Mullen, 1998; Urban & Miller, 1998参照)。
 - 個人的な友情が偏見低減に及ぼす影響についての研究(Hamberger & Hewstone, 1997; Pettigrew, 1997, 1998; Pettigrew & Tropp, 2004; Phinney, Ferguson, & Tate, 1997)
 - 接触の種類を直接操作した実験研究。個人的(⇔タスク志向の)接触は、当該メンバー以外の外集団メンバーにも一般化される(Bettencourt, Brewer, Corak, & Miller, 1992)。

脱カテゴリー化モデルの問題点

- 特定の形式の個人的接触は偏見を低減させる。しかし、以下の点が未解明。
 - その接触は本当に脱カテゴリー化された“対人的”なものか？
 - 集団間関係の問題を長期的に解決することができるのか？
- 脱カテゴリー化モデルを裏付ける実験研究では、一時的に作られた集団が、個人に焦点(互いに印象形成)/タスクに焦点(目の前のタスクに集中する)をあてて接触する。

² 個人化とは(personalization)は個人依存型の情報処理で、社会的カテゴリーはその人物の属性の一つと表象される。一方、個別化(individuation)はカテゴリー依存の情報処理で、その人物は当該カテゴリーの一員として表象される。

- 個人焦点条件ではカテゴリーの顕現性は低下しているが、タスク焦点条件で状況がより集団間の文脈になったかは不明
- 一般化の指標として内・外集団の未知成員をビデオで評定させているが、このとき集団の顕現性は維持されたまま(タスク実施中に身に付けていた所属バッジをターゲットも着用)。
- その他の相関研究でも集団の顕現性が関係に含まれていなかったかが不明確
- ・ 外集団個人への態度を外集団全般に一般化させるためには、最低限の集団顕現性が必要。また、完全な脱カテゴリー化は集団アイデンティティの喪失につながる。これは特に現実場面で自分が少数派の場合は非現実的(Simon, Aufderheide, & Kampmeier, 2001)。

B. The Gaertner-Dovidio Common In-group Identity Model (p. 264)

- ・ カテゴリー間の境界をなくすことではなく、境界線を引きなおすことがより効果があると主張
 - 接触状況では内集団と外集団が、より大きな内集団＝共通内集団アイデンティティに再カテゴリー化され、バイアスが低減 or 除去される
 - 脱カテゴリー化モデルは内集団へのポジティブ評価が低減することから偏見低減を説明したが、共通内集団モデルは外集団メンバーへのポジティブ評価の増加でこれを説明
- ・ 共通内集団モデルを実験的に検討したいくつかの研究では、一時的に形成した集団が用いられる。
 - 上位のカテゴリーによる再カテゴリー化が、各集団のメンバーシップが維持される状況や脱個人化条件と比較して、内集団バイアスを減らすことが示されている(Gaertner et al., 1989; Gaertner, Mann, Dovidio, Murrell, & Pomare, 1990; Gaertner, Dovidio, Rust, Niew, Banker, Ward et al., 1999)
- ・ ただし、このモデルでも偏見の低減が状況や特定人物をこえて一般化されるかという問題はこれらの研究では検討されていない。

共通内集団モデルの特徴

- ・ カテゴリーへの所属全般ではなく、より包括的なまとまりで考え直すだけでいいことが強み
- ・ ただし、一般化の問題と再カテゴリー化(もともと持っていたアイデンティティを放棄して別の上位カテゴリーを獲得する)のしにくさ(Hewstone et al., 2002 参照)という問題は未解決
- ・ Gaertner らは、特定の集団間文脈では“二重アイデンティティ”戦略(元もとの自集団アイデンティティの顕現性をより上位カテゴリーの中で維持する。後述)が有効と主張。
 - 特に多数派-少数派のセッティングではこの戦略は有効と述べている(Dovidio, Gaertner & Validzic, 1998; Gaertner & Dovidio, 2000; Hornsey & Hogg, 2000)

C. The Hewstone-Brown Intergroup Contact Model (p. 264)

- ・ 著者たちの提唱するモデルでは、(Allport の他の条件があてはまるなら)内集団の顕現性を維持することに利益がある場合もあると主張(Hewstone & Brown, 1986; Vivian et al., 1997)。
- ・ 接触が対人的である場合(脱カテゴリー化モデル)も集団内である場合(共通内集団アイデンティティモデル)も、接触相手以外の外集団メンバーへの偏見低減は一般化するとは考えにくい
- ・ 著者たちの主張: 集団の代表的 or 典型的メンバー同士が接触していると考えられていれば、ポジティブな態度は当該集団へと一般化する。
- ・ これが起こるためには、集団への所属に心理的な顕現性がある程度必要(Brown & Turner, 1981)。

集団間接触モデルの特徴

- ・ 脱カテゴリー化や再カテゴリー化モデルで生じていた“同化”の問題が生じない。自分のアイデンティティを放棄する必要はないので、接触介入の際にも抵抗は少ない(Hewstone & Brown, 1986)
- ・ 初期の中心的なアイデアは以下の二つ
 - 接触が集団間のもとのみならず、そこでの接触は表面的なものにしかならず、集団間関係事態は変化しない(Hewstone & Brown, 1986, p. 86)
 - 自分自身と他集団それぞれの強さや長所を認識するような集団間接触では、互いに長所と短所をわかりあっている (←ただし、こちらはその後取り上げなくなった)
- ・ モデルは主に接触研究のより詳細な分析を行うもので、その中でも特に、一般化の問題を社会的アイデンティティ理論からの知見と結びつけて考える
- ・ 初期には顕現性を考慮した研究の数は少なかったが、ここ 20 年で蓄積が進んだ。以降はそれらの研究のレビュー

IV. Experimental Studies of the Impact of Stereotype-Disconfirming Information:

A Cognitive Analysis of Contact (p. 267)

- ・ 著者たちの研究は、Rothbart and John(1985)の集団間接触の認知的分析の影響を受けている。
 - ステレオタイプ関連(特に不一致)情報の処理プロセスを検討し、ステレオタイプ変化や維持がおきる状況を調べている
 - これらの研究のほとんどはステレオタイプに注目しているが、集団間接触研究では態度を扱うことが多い。ステレオタイプと偏見の関係についてはDovidio et al(1996)を参照。

Rothbart and John(1985)のプロトタイプモデル

- ・ Rothbart and John(1985)は、対象や事例はカテゴリーのプロトタイプ的な例として見られる程度に差があることに注目し、ターゲット人物がその集団に結びついて考えられているかを決めるのは、ステレオタイプへのあてはまりのよさ(*goodness of fit*)であることを主張。
- ・ プロトタイプへのあてはまりのよさがあがると、当該メンバーから(メンバーの所属する)集団への推論が増加(see also Wilder, Simon, & Faith, 1996)。不一致情報がステレオタイプに結びつきやすいのは、その属性をもつ個人がそれ以外の点ではカテゴリーに良く当てはまる場合。
- ・ ステレオタイプ不一致情報を典型的な外集団メンバーに結びつけるという考え方は一見矛盾するが、接触状況でもカテゴリーの顕現性は維持されるという著者達の主張と一致する。こうならない限り、ステレオタイプ不一致情報は一般化されずに“re-fencing”(Allport, 1954)される

プロトタイプモデルの検証

- ・ プロトタイプモデルはステレオタイプ変化の認知モデル 3 つからも支持される
 - bookkeeping モデル(Weber & Crocker, 1983) : 不一致情報の蓄積により徐々に変化する
 - conversion モデル(Rothbart, 1981) : 強力な不一致情報により変化する
 - subtype モデル(Ashmore, 1981, Brewer, Dull, & Liu, 1981; Taylor, 1981) : ステレオタイプは階層的な構造を持ち、不一致情報は識別される。サブタイプ化が起きてももとのステレオタイプは保持されたまま

- ・ 著者達が不一致情報を操作(拡散：多数が少しづつもつ/集中：少数だけが多くもつ)して行った研究では、サブタイプモデルが概ね支持されている(Hewstone, 1994, for a review)。

知覚された典型性

- ・ 著者達の研究は、ステレオタイプ変化の認知プロセスも検討した。
 - 拡散条件のメンバーは集中条件のメンバーよりも典型性が高いと判断されており、この知覚された典型性は集中・拡散がステレオタイプ化に与えた影響を媒介した(Johnston & Hewstone, 1992)。
 - 知覚された典型性が媒介要因として働くことは、多くの研究で示されているが(Hantzi, 1995; Hewstone, Hassebrauck, Wirth, & Waenke, 2000; Maurer, Park, & Rothbart, 1995)、ステレオタイプ化との関係は双方向的と考えることが最善(Hewstone & Hamberger, 2000; Maurer et al., 1995; Park, Wolsko, & Judd, 2000)
- ・ プロトタイプ-サブタイプ化モデルは不一致情報の拡散/集中によるステレオタイプの変化の違いを最もよく説明する。
 - ステレオタイプ変化は拡散条件のターゲットの知覚された典型性または当てはまりのよさによって徐々に影響され、集中条件のターゲットのもつ非典型性や当てはまりの悪さでは阻害される(see also Desforges, Lord, Ramsey, Mason, Van Leeuwen, West, & Lepper, 1991; Werth & Lord, 1992)。
- ・ サブタイプ化はステレオタイプを**積極的に保存**することとつながっている。
 - 情報に含まれるサブタイプの数を操作した研究では、サブタイプが2つある場合のほうが1つの場合よりもステレオタイプ化が起こる(Hewstone, Macrae, Griffiths, Milne, & Brown, 1994; Exp. 1)。
 - サブタイプ化を発生、促進させる接触状況では、一成員から集団全体への態度変化の一般化は起こりにくい

知覚された多様性

- ・ 不一致情報の拡散/集中が与えるインパクトには、ターゲット集団の知覚された多様性も影響を与える。

Hewstone and Hamberger (2000)

- 不一致情報の拡散/集中がステレオタイプ化に影響するのは、知覚された多様性が低いときのみ。多様性が高い場合には情報の拡散/集中の影響は見られない。
- 典型性も同じ。不一致情報の拡散/集中が典型性知覚に影響するのは、多様性が低い時のみ
- 研究1では不一致情報を持つ成員の典型性知覚はステレオタイプ化を一部媒介していた。ただし、研究2では典型性とステレオタイプ化の影響は一方向的ではない(cf. Maurer et al., 1995)

まとめ

- ・ 実験研究でも、集団間接触において典型性が重要なことが示された。
 - 集団への所属が顕現的なとき、個人はその集団メンバーとして知覚され、集団知覚は変わらう。顕現性が低い場合は、集団接触は集団知覚の変化につながらない。
 - 典型性が正しく知覚され、集団が均質的と知覚されている場合、ステレオタイプによく当てはまるメンバーほどステレオタイプ変化を生じさせやすい。
 - 典型性はステレオタイプ化を媒介することもあるが、この二つの関係は双方向的

V. Experimental Studies of Group Salience (p. 270)

協力的集団間接触と集団の顕現性

- Wilder(1984, exp1)は集団接触状況を設定し、外集団メンバーの典型性と接触の快・不快を操作
 - 典型性が高いメンバーとの快い相互作用後でのみ、外集団の評価が好意的になった
- Brown, Vivian, and Hewstone(1999)は、外集団メンバーの典型性と外集団の均質性を操作して、イギリス人(参加者)とドイツ人(外集団-サクラ)との接触状況を用いて実験を行った。
 - 典型性と均質性の増加は状況の質を“集団間”(⇔対人間)にする(Brown & Turner, 1981)
 - ステレオタイプ関連ポジティブ語では、外集団が均質である場合のみ、典型性が高いほうが低いほうよりも回答がポジティブになった(p. 271, Table I 参照)
 - ステレオタイプ無関連ポジティブ語では、典型性が高ければ回答がポジティブになった。
- Van Oudenhoven, Groenewoud, and Hewstone(1996)は、集団顕現性の高低・高くなるタイミングを操作して、オランダ人(参加者)とトルコ人(外集団-サクラ)との接触状況の実験を行った。
 - どの条件でも接触相手は好意的に評定されたが、相手の所属集団への態度の一般化が起きたのは集団の顕現性が高いときのみ。タイミングは影響せず。(p. 272, Table II 参照)
- 上記の結果は、集団間の文脈が顕現的であり、脱カテゴリー的接触の知見とは正反対
- 現実状況で集団アイデンティティがしっかり抱かれている場合には、二重アイデンティティ戦略が有効(Gaertner et al., 1993, レジюме p.5 参照)。著者達は上記の結果をふまえ、Brewer-Miller, Hewstone-Brown, Gaertner-Dovidio モデルと二重アイデンティティ戦略を比較検討。

Gonzalez and Brown(2003)

- Bettencourt et al(1992)と Gaertner et al(1989)の実験パラダイムをあわせた方法を使用し、サイズが同じその場限りの集団を形成させ、4つの条件下(個人/別集団/同集団/二重アイデンティティ)で別集団との協力的なタスクをおこなった。
 - 個人条件：各々違う色のTシャツを着て、一人ずつ写真をとって、別々に着席
 - 別集団条件：集団ごとに違う色のTシャツを着て、集団別に写真をとって集団ごとに着席
 - 同集団条件：全員同じ大学Tシャツを着て、全員で写真をとって交互に着席
 - 二重アイデンティティ条件：異なる色の大学Tシャツを着て、集団別・全員で写真をとって集団ごとに着席 ⇒元もとのサブグループと新しい上位グループの両方を強調
- その場についての質問には条件間で差が見られなかったが、一般化指標では個人/別集団条件のほうが同集団/二重アイデンティティ条件よりもバイアスが大きく見られた
- 別集団条件を抜いた追試(Gonzalez & Brown, in press)³では、グループの地位とサイズが操作されたが、結果パターンに違いはなかった。
 - ただし、少数派集団の場合は二重アイデンティティ条件のバイアスが最小
 - 多数派集団の場合は地位が高い方がバイアスが大きい(Fig. 3 参照)
 - 二重アイデンティティ戦略は集団が多数派/少数派によって効果が異なる(e. g., Gaertner & Dovidio, 2000)。これについては後述

A. Limits To The Importance Of Typicality (p.273)

³ 現在も未公開。ただし、PDFファイルはJESPのサイトで入手可能。

- ・ 必ずしも典型性が全般的な変化につながるとは限らない
 - ターゲット集団、集団間関係、接触状況の特徴が影響する

Vescio, Paolucci, & Hewstone (2004; study 1) 共感生起の影響を検討

- 参加者がターゲット(差別を受けた同性愛者)の視点にたつよう教示された場合、ターゲットへの共感が生じるとともに、ターゲットの所属する集団全般(同性愛者全般)への好意も増加
- ただし、ターゲットのステレオタイプへの一致/不一致は、集団全般への好意の変化に影響を及ぼしていなかった。
- ・ この結果については、どちらの条件でもターゲットの典型性が高かったという説明や同性愛者スキーマが慢性的にアクセシブルであったという説明がある
 - Batson, Polycarpou, Harmon-Jones, Imhoff, Mitchener, Bednar, et al. (1997)は、emotion-basedのアプローチはサブカテゴリー化の影響を受けないとしている
 - ターゲットへの共感が生起した場合、ターゲットの所属集団の顕現性があがるために、好意が一般化される

Wolsko, Park, Judd and Bachelor (2003) 典型性の影響は従属測度依存と主張

- ポジティブ or 協力的接触は、ターゲット集団のポジティブな評価につながるが、その接触が集団の多様性知覚に影響を与えるのは、メンバーがステレオタイプ不一致の特徴をもつが、集団の典型的メンバーとみなされている場合のみ
- しかし、彼らの実験の結果は、外集団の評価はカテゴリーの顕現性と典型性の調整を受けるという、Wilder(1984)やBrown et al(1999)などの研究と矛盾している
- 二つの研究では相互作用の質に違いがあったのかもしれない(Wolskoらはよりポジティブで集団間としての性質をもつ)(Wolsko et al., 2003, p.106; see Brown & Turner, 1981; Hewstone & Brown, 1986; Hewstone & Lord, 1998)

まとめ

- ・ 接触状況における集団間の顕現性の高まりは、より好意的な集団全般への態度につながる。
 - これはHewstone-Brownモデルを支持し、Brewer-Millerモデルに矛盾する
- ・ 顕現性の効果は様々な集団間文脈を用いた研究で追試(e.g., Desforges et al., 1991; Desforges, Lord, Pugh, Sia, Carberry, & Ratcliff, 1997; Scarberry et al., 1997; Werth & Lord, 1992)

VI. Correlational Studies Using Group Salience as a Moderator Variable p.275

- ・ 実験で用いた操作を現実場面で用いることはほぼ不可能。そこで、フィールド実験で外集団との接触の量と質を尋ねる手法がとられた。また、主観的な集団の顕現性や集団に一致する特徴の生起頻度、集団メンバーシップへの気づきなども測定
 - 基準変数：外集団全般への態度、外集団への信頼(trust)と寛容性(forgiveness)、知覚された外集団等質性
 - 回帰分析、パス解析、SEMが用いられて、接触が態度に及ぼす影響を集団顕現性が調整(高い顕現性を示した場合のみ影響有 or 顕現性が高いほど影響強)するかが検討された。

A. A Methodological Caveat (p.277)

- ・ 著者達が行った調査のほとんどは横断的な相関研究であるため、因果関係は明らかでない
 - 接触量のちがいが集団間態度の変化をもたらすのか？
 - 事前態度の異なる人々が、それぞれ違うやりかたで外集団メンバーと接触しているのか？
- ・ 3つの方法でこの問題が解決されている(Tausch, Kenworthy, Hewstone, 2004)⁴
 - 優れた統計モデルの利用(Pettigrew, 1997; Powers & Ellison, 1995)。接触⇔態度変化の因果関係を検討した結果、どちらの方向の因果も有意だったが、接触→態度変化の方が強いという結果を得た。
 - 選択の余地のない(→逆向きはありえない)集団間接触場面の検討。Pettigrew and Tropp (2004)のメタ分析の結果、選択がない状況での接触を用いた研究は効果サイズが最大
 - 数はまだ少ないものの、縦断研究も実施されている(Elter & Abrams, 2003, 2004; Gerard & Miller, 1975; Greenland & Brown, 1999; Hamilton & Bishop, 1976; Levin, van Laar, & Sidanius, 2003; Maras & Brown, 1996; Stephan & Rosenfield, 1978)。Levin et al, (2003)では、大学生を対象として5年間のパネル調査を行い、どちらの方向の因果関係も強力に存在することを示した。
- ・ 上記の結果を実験研究(e.g., Brown et al., 1999; Wilder, 1984; Wolsko et al., 2003)とあわせて考えると、接触と態度変化の関係は双方向的、蓄積的なものと考えられる
 - 接触→偏見低減→接触の増加→偏見低減→接触増加→...

B. Empirical Evidence For Salience Moderation From Surveys (p.278)

Brown et al., (1999) study 2

- ・ 回答者：ヨーロッパ6カ国の学生293名。ターゲット：EUに加盟している国に住む知人
- ・ 説明変数：その人との接触の質や量、接触が競争的かどうか、顕現性
- ・ 基準変数：その人の属する国に住みたいかどうか
- ・ 予測どおり、顕現性は有意な調整要因であった (p.279, Fig4)。(顕現性が高い場合、接触は好意的態度と関連)

Gonzalez and Brown (2001)

- ・ Brown et al., (1999)の追試
- ・ 回答者：ヨーロッパ4カ国の学生570名。ターゲット：4ヶ国のメンバー(各国一人ずつ)
- ・ 説明変数：接触の質・量・集団の顕現性 + 接触相手の性格特性評定
- ・ 基準変数：自国、ターゲット国に対するポジティブ感情
- ・ Brown et al., (1999)と同様の結果が得られた。顕現性は接触と態度の関係を調整していた。(顕現性が高い場合、接触は好意的態度と関連)
- ・ 顕現性の高い場合、性格特性評定と集団への態度の相関がもっとも高かった

⁴ Tausch, N., Kenworthy, J. B., & Hewstone, M. (2004). Conflict resolution and prevention: The role of intergroup contact. In M. Fitzduff and C. E. Stout (Eds.), Psychological approaches to conflict and war. Praeger.

Brown, Maras, Masser, Vivian, and Hewstone(2001)

- ・ 回答者：イギリス・フランス間を往来するフェリーの英国人乗客 352 名。ターゲット：個人的に親しいフランス人
- ・ ターゲットとの関係について、集団の顕現性が高い場合は接触とフランス・フランス人への好意的態度に有意な相関があった。顕現性が低い場合は有意な相関みられず。

Gonzalez, Saiz, Manzi, Ordones, Millar, Sirlopu, and Brown(2003a)

- ・ 回答者：チリ人高校生 1965 名。ターゲット：マイノリティ集団 (Mapuche 族、老人、障害者、福音派伝道者、ペルー人)。
- ・ ターゲット集団間の顕現性と集団間接触が偏見やポジティブ感情を予測するかを SEM を用いて検討
- ・ 5 集団のうち 3 つで、接触が集団メンバーへの態度に有意に影響していた。集団メンバーへの態度と集団全般への態度の間には強い関係があった。2 集団ではこの間を顕現性が調整 (チリ人政党への態度を検討した研究も同様の結果。Gonzalez, Manzi, Saiz, Brewer, De Tezanos, Torres, et al., 2003b)

Harwood, Hewstone, Paolini, and Voci(2005)⁵ Study 1

- ・ 回答者：大学生 192 名。ターゲット：年配の人々
- ・ 説明変数：祖父母との接触の量、質。基準変数：老人全般への態度
- ・ 祖父母との接触が頻繁であるものについてのみ、接触の質と態度が関連していた。この場合、(年齢の) 顕現性も調整要因として影響していた。接触頻度が低い場合はこれらの結果は見られず

Voci and Hewstone (2004a) study1

- ・ 回答者：イタリア人労働者 145 名。ターゲット：移民
- ・ 説明変数：職場での移民(ターゲット)との接触の量と質、接触時の集団の顕現性。基準変数：接触相手と相手の所属集団全に対する知覚された多様性と態度
- ・ ターゲットとの接触の量と質は、ターゲットへの態度と正の相関を示したが、顕現性は負の相関を示した。
- ・ 集団の知覚された多様性と同僚への態度は集団全般に対する態度と正の相関を示した。
- ・ 顕現性の影響のしかたは次の 4 通り
 - 顕現性が高い場合、低い場合よりも接触の質とターゲットへの態度の相関が高い
 - 顕現性が高い場合、接触の質は集団全般への態度と有意な正の相関
 - 顕現性が低い場合、接触の質は集団全般への態度と有意な負の相関
 - 顕現性が高い場合、低い場合よりもターゲットへの態度が集団全般への態度に一般化される

Voci and Hewstone (2004a) study2

- ・ 回答者：工場労働者 76 名。ターゲット：北アフリカ人とアルバニア人の同僚
- ・ 説明変数：接触相手がどのくらい集団の典型的メンバーか、基準変数：接触相手への態度、所属集団全般への態度

⁵ Harwood, J., Hewstone, M., Paolini, S., & Voci, A. (2005). Grandparent-grandchild contact and attitudes toward older adults: Moderator and mediator effects. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 31, 393-406.

- ・ 典型性の影響のしかたは、study1 の顕現性とほぼ同じ
 - 北アフリカ人との接触の場合、接触の質は集団全般への態度に直接影響していなかったが、典型性が高い場合の態度とは有意な正の相関を示し、典型性が低い場合は無関連だった
 - アルバニア人との接触の場合、接触の質はターゲットへの態度と正の相関
- ・ 集団への態度は移民全般への態度に一般化されていた。この傾向は接触相手が北アフリカ人のときより強かった。これは、北アフリカ人のほうが代表的な移民としてとらえられていたため

Brown, Eller, Leeds, and Stace(2004) 縦断研究

- ・ 英国内の公立学校の生徒 213 名。ターゲット：近隣の私立学校(=地位高)の学生
- ・ ターゲットに対する態度を、4ヶ月間調査
- ・ 集団間態度指標：望まれる私立校学生との親密さ、私立校学生へのネガティブなステレオタイプ、外集団の脱人間化(Leyens, Paladino, Rodriguez, Vaes, Demoulin, Rodriguez, & Gaunt, 2000; 外集団メンバーよりも内集団メンバーに二次感情、人間的感情を帰属する傾向)を測定
- ・ time1 における接触の頻度は time2 における学生への態度を(事前の態度を統制したうえで)有意に予測。事前の外集団への態度は(事前の接触を統制すると)その後の外集団との接触を予測しなかった。
- ・ ネガティブステレオタイプ化については、顕現性の縦断的な調整効果がわずかに見られた。
 - time1 で顕現性が高い場合、time1 での接触の質は time2 でのステレオタイプ化と負の相関を示した。顕現性が低い場合は正の相関が見られた。
 - 逆の因果関係は有意でなかった

C. Summary Of Moderational Evidence (p.282)

- ・ 外集団メンバーとの接触の量と質は、相手はその集団の典型的なメンバーと知覚される場合 and/or 集団への所属が心理的に顕現的である場合に、集団間態度に一般化される(Table II 参照)
- ・ 集団間接触はポジティブな態度につながる。ただし、それは接触のときに集団カテゴリーが顕現的である場合のみ

VII. Mediators of the Effects of Contact (p. 284)

A. Cognitive and Affective Mediators (p. 284)

- ・ 本節では、態度変化を導くプロセスを検討するために媒介要因に注目して、これまでの研究をレビューし、オリジナルの Hewstone-Brown モデルとその改訂について述べる
- ・ 媒介要因は認知的要因と感情的要因に分類することが可能
 - 認知的要因①：外集団に関する知識の改善(特に集団間の違いについての知識)
 - 認知的要因②：個人化が促進される程度(Brewer-Miller モデルで強調。個別情報の獲得→外集団メンバー経験の見方の洗練→外集団全体の理解改善)
- ・ ここ 20 年で、集団間接触を認知プロセスだけではなく(Johnston & Hewstone, 1992; Pettigrew, 1986, 1998)、感情的プロセスにも注目して理解していくことが重視されている(Fiske, Cuddy, Glick, & Xu, 2002; Mackie, Devos, & Smith, 2000)

- 感情プロセスは認知的要因よりも集団間行動をよく予測(Stangor, Sullivan, & Ford, 1991)
- 接触プロセスにおいてもより大きな役割(Pettigrew, 1998; Tropp & Pettigrew, in press)⁶
- 接触状況には friendship をはぐくむ機会が必要。friendship はネガティブ感情を低減し、ポジティブ感情を増大させる。(Pettigrew, 1998, p. 76)
- 以降では、集団間不安の理論をレビューし、この要因が接触の効果の説明に有益かを検討
- また、それ以外の媒介要因も検討(不安低減とポジティブ感情増大、共感、視点取得)
- 集団間接触が直接的なものなのか、拡張されたものなのかも検討

B. Intergroup Anxiety as a Mediator of Intergroup Contact Effects (p. 285)

集団間不安とは

- 集団間不安とは、接触状況で生じるネガティブな感情プロセス(see Greenland & Brown, 1999)。外集団メンバーとの将来の接触を予期する場合や、実際に経験する場合に生じる
- Stephan and Stephan(1985)によると、外集団メンバーとの接触では、危惧の念が抱かれやすい。この不安は集団間の相互作用がネガティブな結果(当惑、排除、差別、誤解)におわるという予測から生じる。
- 最低限の事前経験、ネガティブな外集団ステレオタイプ、集団間衝突の歴史、地位の格差、割合の格差などが集団間不安の先行要因
- 喚起の高まりは認知や知覚を狭めるため、ヒューリスティックへの依存につながる。また、単純にネガティブ感情がその原因と考えられる外集団成員と連合するという考えもある(Bodenhausen, 1993; Stephan & Stephan, 1985; Wilder, 1993; Wilder & Simon, 1996, 2001; see Paolini, Hewstone, Voci, Harwood, & Cairns, in press)
- Mendes, Blascovich, Lickel, and Hunter(2002)によると、不安には生理学的なもの(汗や心拍数の増加)、行動的なもの(パフォーマンスの低下)、主観的なもの(自己報告)がある。彼らは外集団との事前の接触の質(限定的 vs 包括的)により、これらの反応が異なることを示した。
- 集団間不安は、接触の回避や集団判断の極化を導く場合があるが、親密な関係は不安を低減させ(La Greca & Lopez, 1998)、友情がストレスを和らげるはたらきをもつのであれば(Cohen, Sherrod, & Clark, 1986)、外集団メンバーの友人をもつことは他の外集団メンバーとの相互作用でネガティブな期待を抱くことを防ぐかもしれない(Paolini et al., 2004; see also Tropp, 2003)

1. Research on Intergroup Anxiety (集団間不安研究)

a. Direct Contact Effects(直接接触の効果)

Islam and Hewstone(1993)

- 接触の性質が“集団間”か“個人間”かによって不安レベルは影響を受けるかを検討
- 回答者：バングラデシュのイスラム教徒(多数派)とヒンズー教徒(少数派) 131名。ターゲット：お互い
- 説明変数：相手集団との接触の量、質、接触の性質(集団間/個人間)。基準変数：外集団多様性、外集団全体への態度。媒介変数：集団間不安

⁶ Tropp, L. R., & Pettigrew, T. F. (2004). Intergroup contact and the central role of affect in intergroup prejudice. In C. W. Leach & L. Tiedens (Eds.), *The social life of emotion* (pp. 246-269). Cambridge: CambridgeUniversity Press

- ・ その結果、接触の量と質は集団全般への態度に正の相関を示し、集団間不安には負の相関を示した。接触の性質を“集団間”と思うことも不安と連合していた。
- ・ Stephan and Stephan(1985)と同様、集団間不安は接触の量と質から予測され、外集団への態度や多様性を予測した。また、カテゴリーの顕現性と態度・多様性知覚を完全に媒介していた。(図5参照)

Greenland and Brown(1999)

- ・ 回答者：自国在住のイギリス人と日本人 236 名。ターゲット：外国人
- ・ 相手集団のメンバーと接触する際に、相手の個人的な性格に気づく程度と相手の国籍や文化に気づく程度をそれぞれ評定
- ・ どちらの評定も集団間不安と結びついており(個人的な性格→負、国籍や文化→正)、相手集団へのネガティブ態度と集団間バイアスを予測していた
- ・ 小規模なフォローアップ研究(Greenland & Brown, 1999, study 2; see also Levin et al., 2003)では縦断的な調査が行われ、不安が集団間の顕現性を高めるという因果関係(逆ではなく)が示唆された。

集団間不安を考慮した研究の利点

- ・ 集団間の相互作用からもたらされる、態度の一般化という効用のほかに、個人間の相互作用からもたらされる感情的なメリットのバランスをとることが主張されている。
- ・ 接触が態度に及ぼす効果の媒介要因を明らかにしている

北アイルランドでの研究

(Hewstone et al., in press a; Hewstone, Cairns, Voci, Paolini, McLernon, Crisp, & Niens, 2005)

- ・ 回答者：Ulster 大学(分離されていない)学生や大人を対象に検討
- ・ この地域は、歴史的に宗教的な対立がある。接触仮説の知見を適用することができれば、より些細な衝突にも知見を使うことができる

Craig, Cairns, Hewstone, and Voci (2002)

- ・ 回答者：16~18 歳のプロテスタント/カトリック学生 440 名。ターゲット：お互い
- ・ 外集団の友人の評価、不安、外集団全般との接触の量と質の評価が尋ねられ、それが外集団の評価やそれぞれの宗教の重要性を予測するかが検討された。(結果は図6参照)
 - 宗教の重要性は接触と負の相関をもち、不安と正の相関をもった。
 - 接触は外集団の友人の評価と不安に関連していた
 - 不安は外集団全般への態度と負の相関を示した。

Vonofakou, Hewstone, and Voci (2003)

- ・ 回答者：学生 73 名。ターゲット：同性愛者
- ・ 友だちづきあい、集団間不安、態度測定(内容、アクセシビリティ、強さ)、行為傾向(action tendency)が測定された。
 - 直接的な接触は、よりアクセシビリティが高く、強い態度につながっていた
 - 接触は不安を媒介要因として、間接的に上記の4つの指標に影響していた

b. *Extended Contact Effects* (拡張的な接触の効果)

- Wright, Aron, McLaughlin-Volpe, and Ropp(1997)は、本人が外集団と直接接触しなくても、内集団の仲間が外集団メンバーと仲良くやっているということを知るだけで、外集団への態度がポジティブになることも可能と主張
 - どのような内集団と外集団の関係が好ましいかについての知覚された規範が変化する
 - 接触している外集団メンバーが反ステレオタイプの事例としてとらえられ、ステレオタイプが修正される
 - 内集団メンバーに対して生じた自発的な共感(他者を自己にとりこむ、Aron & Aron, 1996)が、内集団メンバーと接触している外集団メンバーに拡張される
- Wright et al(1997)は、拡張的な接触は直接的な接触よりも集団間不安に陥るリスクが低いことを指摘して、拡張的な接触と態度変化の調整要因(集団の顕現性による)と媒介要因(不安の減少)にも言及している。

Paolini et al., (2004) study 1

- 回答者：北アイルランドのカトリックとプロテスタント 341 名。ターゲット：お互い
- 説明変数：相手集団に所属する友人の数、相手集団に友人をもつ自集団の友人の数。基準変数：外集団への偏見、外集団の多様性知覚、集団間不安
- 直接的/拡張的にかかわらず、接触は偏見レベルの低減と多様性知覚の増加とつながっており、集団間不安と負の相関を示した。集団間不安の高さ自体も偏見、多様性知覚に影響していた
- 直接的接触と多様性知覚、拡張的接触と偏見は、集団間不安によって完全に媒介されていた
- 直接的接触と偏見、拡張的接触と多様性知覚は、集団間不安によって一部媒介されていた
- フォローアップ研究もほぼ同じ(Paolini et al., (2004) study 2)

研究の意義と限界

- これらの研究においては、接触の量は外集団に所属する友人の数。
- これはAllport(1954)が指摘する“友人となる可能性(acquaintance potential)”の重要性を再確認し、それが集団間不安を低減させるという機能をもつことを示している
- これはBrewer-Millerの脱カテゴリー化/個人化モデルを支持するようにも見える
- しかし、これらの研究ではカテゴリーの顕現性は測定されておらず、関係がどのような視点で見られていたかが不明

C. Additional Negative and Positive Mediators of Contact Effects (p.292)

- 近年では集団間不安以外のネガティブな媒介要因も明らかになっている。一つは知覚された脅威で、もう一つは集団間不安以外の感情
- 知覚された脅威は現実的脅威(政治経済関連の脅威)と象徴的脅威(価値観、信念、世界観への脅威)に分類され、偏見を予測する(Stephan & Renfro, 2003; Stephan & Stephan, 2000; Stephan, Boniecki, Ybarra, Betencourt, Ervin, Jackson, McNatt, & Renfro, 2002)
- 集団間不安以外のネガティブ感情(恐怖、怒り、不快感)は特定の行為傾向(飛行、争い、回避)を導くため、実際の行動をよく予測できる(Mackie & Smith, 2002; Smith, 1993)
- Petigrew(1997)は、集団間の友情を通して集団間のポジティブ感情を促進することを主張。

- 鍵となるのは共感。視点取得と関係が強い。これらは偏見を低減させることが知られている (Coke, Batson, & McDavis, 1978; Batson et al., 1997; Finlay & Stephan, 2000; Galinsky & Moskowitz, 2000)

共感・視点取得と集団間態度

- ・ 共感とは、他者の感情状態を目撃したことから生じる、身代わりの感情。共感には他者が自分の状況をどう知覚し、どう感じるかを想像することが含まれている。
- ・ 視点取得は自己と他者の重なりを増やして(see Aron, McLaughlin-Volpe, Mashek, Lewandowski, Wright, & Aron in press)、ターゲットの判断をより自己よりにする (Galinsky & Moskowitz, 2000)
- ・ 自己の属性を外集団メンバーにも帰属することで、その人の評価がポジティブになり、それが外集団全般へ一般化される
- ・ また、視点取得や共感、他集団とも人間性や運命を共有することで偏見や差別を減らしたり、愛他的な動機や正義を回復させようとする動機を高める (Batson, Early, & Salvarani, 1997; Dovidio, etn Vergert, Stewart, Gaertner, Johnson, Esses, Riek, & Pearson, 2004)

自己開示と集団間の友情(Pettigrew, 1997)

- ・ 自己開示とは、自己の重要な側面を他者に見せること。対人関係を発展させていく上で重要。
- ・ 自己開示は集団間接触状況でもポジティブな態度につながる可能性がある
 - 開示された方は相手への不安を減らすし、開示する方は相手からの見られ方をコントロールできるようになる (Berger & Baradac, 1982)
 - 相手との関係をより親密に、深くすることができる (Brewer & Gaertner, 2001; Laurenceau, Barrett, & Pietromonaco, 1998; Reis & Shaver, 1988)。
 - 接触相手の個別的な特徴に注意が向いて、ステレオタイプが使用されなくなる (Fiske & Neuberg, 199)

感情面からの検討

- ・ 集団間態度の改善は、ネガティブ感情の低減とポジティブ感情の増大の両方から引き出されるが、これまでの研究ではネガティブ感情の低減が主に取り上げられており、ポジティブ感情の研究は始まったばかり。
- ・ また、認知プロセスと感情プロセスは独立しているが、同時に働くことも多い

1. Mediation of Contact Effects by Additional Negative and Positive Variables

(追加されたポジティブ・ネガティブ要因が接触効果に与える媒介的影響)

a. Direct Contact Effects(直接接触の効果)

Voci, Hewstone, Cairns, & McLernon, (2001)

- ・ 北アイルランドの成人 936 名。ネガティブ/ポジティブ感情が集団間態度に与える影響を検討
- ・ 説明変数：接触の機会、接触。基準変数：偏見、外集団への信頼、寛容
- ・ 媒介要因：ネガティブ＝集団間不安、ポジティブ＝視点取得
- ・ 接触機会は接触に正の影響。接触は不安の低減と視点取得の増加を媒介して、偏見、外集団への信頼、寛容のすべてに影響

- ・ 不安の影響と視点取得の影響は独立で、両者の相関は低い
- ・ 潜在的な因果関係を検討したところ、すべてのパスで接触→態度が有意であった(逆はns)

Tam, Hewstone, Kenworthy, Voci, Cairns, & Geddes, (2003) Study 1

- ・ 回答者：北アイルランドの大学生 93 名。集団間不安以外の集団間感情と共感を測定
- ・ Smith(1993)の appraisal 理論をもとに、事前の感情と接触で行為傾向を予測
 - 集団間の友情はネガティブ感情と負の相関で、ポジティブ感情や共感と正の相関
 - ネガティブ感情はネガティブな行為傾向、ポジティブ感情はポジティブな行為傾向を予測
 - 共感はどちらの行為傾向も予測
- ・ ポジティブな媒介要因をいれると、ネガティブな媒介要因だけのときより予測が改善される

Tausch, Hewstone, Singh, Ghosh, and Biswas (2004)

- ・ 平和な地域(N=438)と危険な地域(N=304)の両方で、ヒンズー教徒とイスラム教徒の接触を検討
- ・ 説明変数：接触の量と質、衝突経験。基準変数：外集団への態度
- ・ 媒介要因：集団間不安、現実的脅威、象徴的脅威、知識
- ・ 接触の考課は概ね予測どおり。接触は脅威や不安とネガティブに相関した。
- ・ 媒介要因の影響のしかたは、どちらの教徒か、どの都市かによって一部異なった
- ・ 大事なことは、単一の媒介要因(集団間不安)よりも複数の媒介要因(ポジティブ/ネガティブ)をおくほうが予測が改善されることが再現されたこと

Turner, Hewstone, and Voci, 2004, study 1

- ・ 自己開示の影響をみるとともに、これまでの態度測度に潜在的測度をくわえて検討
- ・ 回答者：8～11歳の白人小学生 60名。ターゲット：アジア人の子供
- ・ 説明変数：アジア人の子供との友情。基準変数：顕在的、潜在的態度(IATを使用)
- ・ 媒介要因：外集団への自己開示と集団間不安が媒介要因
- ・ 他集団成員との友情はIATに直接的なポジティブな効果をもたらし、自己開示と集団間不安にも影響した。どちらの媒介要因も健在指標に影響
- ・ 接触の効果を自己開示が媒介することを示した最初の相関研究。

Tam, Hewstone, Harwood, and Voci, (2004)

- ・ 回答者：大学生 77名。ターゲット：老人
- ・ 媒介要因は、一人の事例(もっとも頻繁に相互作用する祖父母)への自己開示、不安、共感
- ・ 説明変数：基準変数：老人に対する顕在的態度と潜在的態度(IAT)
- ・ 接触量は潜在的態度に直接的なポジティブ効果をもたらし、自己開示をポジティブに予測
- ・ 自己開示は不安にも共感にも相関。
- ・ 不安も共感も顕在的態度に影響。ただし、方向は逆。
- ・ ここでも、ポジティブ感情とネガティブ感情が独立に顕在的が外集団への態度を媒介していることが示された
- ・ 二つの研究は、潜在的な指標をもちいることによって、社会的望ましさの影響を排除。潜在態度は顕在態度よりも自発的な行動をよく予測するという点でも重要(Dovidio, Kawakami, Johnson, Johnson, & Howard, 1997b)

・どちらの効果も直接的なものだったのは、familiarity の効果かもしれない(Bornstein, 1989; Karpinski, & Hilton, 2001)

b. Extended Contact Effects (拡張的な接触の効果)

Turner et al., (2004), study 2,3

- ・ 回答者：英国在住のアジア人と白人の若者 96 名。ターゲット：お互い
- ・ 説明変数：接触の機会、直接的接触、拡張的接触。基準変数：顕在的、潜在的態度(IAT を使用)、多様性知覚
- ・ 媒介要因：外集団への自己開示と集団間不安
- ・ 接触機会は潜在態度と外集団との直接接触を予測したが、拡張的接触は予測せず
- ・ 直接的接触は自己開示を予測し、拡張的接触は自己開示、集団間不安を予測して、ダイレクトに外集団態度にも影響した
- ・ 自己開示は集団の多様性知覚、外集団への態度を予測し、集団間不安は外集団態度を予測

フォローアップ研究

- ・ 回答者：白人大学生 164 名。ターゲット：アジア人
- ・ 相互の自己開示を測定(自分⇄外集団メンバー)
- ・ 拡張的な接触は、集団間不安だけではなく、外集団からの自己開示を経て結果に影響することを指摘
- ・ 接触が潜在的態度に与える影響は直接的なものであり、環境的な連合が原因であることも指摘

Tam et al., (2003) study 2

- ・ Paolini et al., (2004)の研究を北アイルランドで追試。回答者 180 名。
- ・ 拡張的接触の指標(説明変数)：さまざまな集団メンバー(隣人、友人、故郷での親友と大学での親友)と外集団メンバーとの接触、接触の重要性。基準変数：ポジティブ行為傾向、ネガティブ行為傾向、外集団への態度
- ・ 媒介要因：共感的感情、視点取得、ポジティブ感情、ネガティブ感情
- ・ 接触の機会や拡張的接触は接触の重要性を予測
- ・ 接触の重要性は、外集団との友人関係から 4 つの感情指標への影響を媒介
- ・ 4 つの感情指標は複合的に結果を予測
- ・ 接触→要因へのパスは有意だったが、逆方向のパスは有意ではなかった

2. Summary (結果の要約)

- ・ Table IIIを参照

D. Simultaneous Moderation and Mediation (p.302)

・ 本節では、調整要因(集団顕現性)が接触と媒介要因の関係や媒介要因と結果の関係に影響を与えるのかを検討する

1. Correlational Evidence of Moderated Mediation Effects (調整された媒介効果の相関研究)

Voci and Hewstone (2003)

- ・ 接触が移民に対するイタリア人の態度に与える影響を不安が媒介するかを二つの研究で検討
- ・ 接触の質と量をかけあわせて接触指標を作成(ポジティブな接触が多いほど効果大: Allport, 1954)

study 1

- ・ 回答者: 伊人大学生 310 名。ターゲット: 移民
- ・ 接触は外集団の多様性知覚と態度、偏見に直接的に影響(図 8 参照)。不安はこれを媒介
- ・ 集団の顕現性は接触の効果を調整
 - 集団の顕現性が高いほど、接触が好意的態度に与える影響が大きい
 - 顕現性が高いほど、接触が集団間不安に与える影響が大きい

study 2

- ・ 回答者: イタリア人病院勤務者 94 名。ターゲット: 移民
- ・ 接触は集団としての移民の態度へも、移民の権利の許容にもポジティブな直接的影響を与えていた(図 9 参照)
- ・ 接触は同僚の移民への態度や職場での集団間不安とも関連していた。反対に、職場での不安は同僚の移民への態度にネガティブな影響を与え、それが従属測定にも影響していた
- ・ 接触が不安に与える影響が見られたのは、集団の顕現性が高かった場合のみ
- ・ 同僚への態度と集団全体への態度は顕現性が高い場合に関連が強い
- ・ 同僚への態度が移民全体の権利の許容に一般化されたのは、顕現性が高い場合のみ

Harwood et al., (in press)⁷, study2

- ・ 回答者: 大学生 100 名。ターゲット: 年配の人。頻繁に会う祖父母との接触の効果を検討
- ・ 媒介要因: 集団間不安、視点取得、個人化、自己開示、順応(accommodation)
 - 順応(accommodation): 回答者がコミュニケーションの面で祖父母に適応していく過程。対人間の連帯意識の指標として重要で、これがない場合は集団間の差異化が生じていると考えられる(Shepard, Giles, & Lepoire, 2001)
- ・ 媒介要因は集団レベル(老人全般に対して)ではなく、個人レベルの(祖父母に対して)で測定
 - これは個人レベルの媒介要因のどの特徴が集団レベルの媒介要因に影響するかを検討するため
- ・ 集団間不安、視点取得、順応は接触の質が態度に与える影響に独立に影響していた(Table IV)
- ・ 個人化、自己開示は接触の質が集団の多様性知覚に与える影響の一部に独立に影響していた
- ・ すべての媒介要因が投入された場合は、視点取得のみが態度を媒介し、個人化のみが多様性知覚を媒介していた。影響の方向はどちらもポジティブ
- ・ 集団間の顕現性は外集団態度への媒介要因の影響を調整していた
 - 調整が予測→媒介のプロセスで生じていたのか、媒介→基準のプロセスで生じていたのかを検討したところ(Wegner & Fabrigar, 2000)、集団間の顕現性の影響が見られていたのは、予測→媒介、すなわち**接触の質が媒介要因に影響する過程**においてであった
 - 顕現性が高い場合、接触の質は視点取得や不安に強い影響を与えていた
 - 顕現性が高い場合のみ、接触の質は順応に影響を与えていた

⁷ Harwood, J., Hewstone, M., Paolini, S., & Voci, A. (2005). Grandparent-grandchild contact and attitudes towards older adults: Moderator and mediator effects. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 31, 393-406.

Voci and Hewstone, (2003a) study1

- ・ 回答者：イタリア人成人 169 名。ターゲット：移民。共感が態度に与える媒介的影響を検討
- ・ 接触指標（説明変数）：接触の質と量をかけあわせたもの。基準変数：外集団への態度と偏見。
- ・ 媒介要因：不安と共感
- ・ 接触は結果の両方に直接的にも、媒介要因を経ても影響していた
- ・ 顕現性は上記の効果を調整していた
 - 顕現性が高い場合のみ、接触は偏見に直接影響していた
 - 顕現性が高い場合のみ、接触は共感を増加、不安を低減させていた

Voci and Hewstone, (2003a) study2

- ・ 回答者：イタリア人成人 172 名。ターゲット：移民
- ・ 接触を 2 種類(親密なもの/一般的なもの)にわけ、それぞれが態度や偏見に与える影響や、共感の媒介のしかたを検討
- ・ 一般的な接触は態度にも偏見にも直接影響していた
- ・ どちらのタイプの接触も共感を介して態度、偏見に影響していた
- ・ 顕現性は親密な接触が共感に与える影響、一般的な接触が偏見に与える影響を調整していた

Voci and Hewstone, (2003a) study3

- ・ 回答者：イタリア人労働者 143 名。ターゲット：移民
- ・ 接触を仕事関連とそれ以外にわけて、接触が態度や移民犯罪者の評価に与える影響や、共感の媒介のしかたを検討
- ・ 一般的な接触は犯罪知覚や態度に直接影響していた
- ・ どちらのタイプの接触も共感を介して態度、犯罪知覚に影響していた
- ・ 顕現性は仕事上の接触が共感に与える影響、一般的な接触が態度に与える影響を調整

Hewstone, Voci, Cairns, & McLernon (2003) 北アイルランドでの研究

Study1

- ・ 回答者：北アイルランド人成人 970 名。
- ・ 説明変数：接触の機会、接触の量と質。基準変数：外集団評価
- ・ 媒介要因：集団間不安、顕現性
- ・ 接触の機会は実際の接触を予測し、外集団の評価に直接的にも、媒介要因を介しても影響
- ・ 接触と評価の連合は顕現性が高い場合は強かったが、低い場合はわずか

Study2

- ・ 回答者：Ulster 大学学生 343 名。
- ・ 説明変数：集団同一化、外集団の友人との接触。基準変数：外集団の評価、寛容
 - 集団同一化：自分がどのくらい所属集団に同一化しているか
 - 寛容：これまでの対立で相手が果たしてきた役割をすすんで許す程度
- ・ 媒介要因：集団間不安、顕現性
- ・ 集団間同一視は寛容、外集団との接触に直接影響した。外集団との接触は外集団の評価、寛容、集団間不安に影響していた
- ・ 集団間不安は外集団との接触が結果に及ぼす影響をネガティブに媒介
- ・ 接触と外集団評価の関係、接触が寛容の関係は顕現性が高い場合のみ見られた

Vonofakou et al. (2003) study2

- ・ 回答者：大学生 160 名。ターゲット：同性愛者男性
- ・ 外集団との接触は態度のアクセシビリティと強さを直接予測していたが、関係の親密さや集団間不安に媒介された間接的な影響ももっていた
- ・ また、顕現性が高い場合のみ、関係の親密さは集団間不安を予測していた

3. Summary (結果の要約)

- ・ Table V を参照

E. Summary of Mediation Evidence (p. 308)

- ・ 諸媒介要因(特に感情的要素を含むものは、調整要因と同様影響力が強く、支持する知見も多い
- ・ また、重要な媒介要因の効果は集団の顕現性の調整を受けている
- ・ これらの結果は、感情がポジネガにかかわらず、接触が態度変化に与える影響を媒介していること、それが直接的、拡張的な接触の両方に影響していることを示している
- ・ どちらが重要かは状況や対象集団、結果の変数により異なる(例えば Stephan & Stephan, 2000)
- ・ それぞれの媒介要因がどの条件できいてくるかを系統的に調べた研究が必要

VIII. Evidence from Educational Settings (p. 309)

- ・ この節では、学校の教室という現実場面を用いた研究を紹介。特徴は次の3つ
 - 研究者の考える前提に汚染されていない現実場面を用いて、接触モデルを検討できる
 - 小学生を参加者とした数少ない研究。発達と接触モデルの関係を検討できる
 - 対象集団は、これまであまり扱われてこなかったスティグマ化された集団(障害児、難民)

Maras and Brown, (1996) (Section II 参照)

- ・ 障害児に対する小学生の態度を検討
 - 実験群：学校プログラムに参加して、障害児の学校へ3ヶ月間毎週通った
 - 統制群：何もしなかった
- ・ 見知らぬ子供のうつつた写真(障害有/なし、障害の種類は多様)を分類する課題を行った。
 - 初期には実験群と統制群の分類方略は同じ(性別と障害の有無、障害種類の区別はなし)
 - 終期には、実験群は障害の分類を細分化したが、統制群の分類は初期と違いがなかった。
- ・ 障害児がさまざまな能力をもつ程度を評定させると、実験群の子供は時間の経過と共に、障害の種類に応じて評定を異ならせた(例えば、聴覚能力の評定は聴覚障害の子供のみ低く評定し、学習障害、身体障害のある子供の評定は高くする)。思考能力の評定はすべての障害児について高く評定されるようになった。統制群の子供には変化は見られず。(図 10 参照)
- ・ これらの知見から、接触が特定の外集団の特定の能力評定のみに影響するのではなく、それ以外の外集団や別次元についても一般化を促進することがわかった。
- ・ この一般化が起こった背景として、研究の接触状況が Hewstone-Brown モデルで言われている高顕現性条件と類似していたことが重要

Maras and Brown, 2000

- ・ 聴覚障害をもつ子供に対する態度を4つの学校で比較検討
 - 統合条件：2つの学校では、聴覚障害児が障害のない子供の学校に入れられた。
 - ◇ カテゴリー化接触条件：構内の特別教室に通い、補助器(目立つ)をつけることを奨励され、子供たちは聴覚障害について話し合い、障害を持つ子供とのコミュニケーションのとり方を教わった ⇒ 集団の顕現性を高める操作。Hewstone-Brown に対応
 - ◇ 脱カテゴリー化接触条件：特別教室はつくられず、補助器は奨励されず、話し合いや情報提供はなされなかった ⇒ Brewer-Miller モデルに対応
 - 統制条件：残り2つの学校では、聴覚障害児はいなかった。
- ・ その結果、特定の障害者集団(聴覚障害者)でもそれ以外でも、態度は脱カテゴリー化接触条件のほうがカテゴリー化接触条件よりもポジティブ。
- ・ カテゴリー化接触条件の子供は、障害のある子供をよりネガティブに評定。統制群の回答は脱カテゴリー化接触条件よりだった。(図11参照)。
- ・ この結果は、Maras and Brown(1996)に矛盾しているが、カテゴリー化接触条件ではAllportの最適条件が揃っていなかったことが原因かもしれない(たとえば、地位の等しさ)
- ・ このような質の接触では、集団の顕現性がかえって集団への態度を悪くするかもしれない。
- ・ 個人から集団への一般化は、カテゴリー化接触条件で最大であった。この結果は、モデルのあてはまりについての楽観的予測に警鐘を与える。
- ・ また、Pettigrew and Tropp(2004)のメタ分析によると、障害者との接触の効果は他の集団との接触の効果よりも小さいことがわかっている

Cameron, Rutland, and Brown(2004)

- ・ 障害児(研究1)または難民(研究2)に対する小学生の態度を検討
 - 介入条件：週1回、6週間にかけて介入プログラムに参加
 - ◇ 物語課題条件：内集団のメンバーが外集団メンバーと友達になる架空の物語を読む。物語は個人属性と集団属性の両方を強調し、外集団メンバーを典型的に描いた
 - ◇ 認知課題条件：内外集団のメンバーをうつした写真を様々な次元で分類する課題にとりくむ。外集団メンバーを差異化したり、交差カテゴリー的に見ることが目的
 - 統制条件：介入プログラムなし
- ・ どちらの研究でも、拡張された接触と集団顕現性の操作を行った条件(物語条件?)で統制条件や認知課題条件よりも評価が好ましくなっていた。

IX. Acculturation Orientations and Intergroup Attitudes (p. 315)

- ・ ホスト国が難民に対して講じる文化変容方略は、自国アイデンティティを守りたいという思いと外集団と接触をもちたいと思う程度の組合せから4つに類型化され、マイナーチェンジを経ると接触モデルに対応する(Dovidio, Kawakami, and Gaertner, 2000)
 - 統合(integration)：二重アイデンティティモデル
 - 同化(assimilation)：共通内集団アイデンティティモデル
 - 分化(separation)：Hewstone-Brownの集団間差異化形成(モデル)
 - 周縁化(marginalization)：脱カテゴリー化モデル
- ・ 少数派の集団では統合が好まれ(Berry, 1997; Van de Vijver, Helms-Lorenz, & Feltzer, 1999;

Van Oudenhoven, Prins, & Buunk, 1998))、結果の面から見てもよりよい文化変容をもたらすことがわかっている (Berry, 1997; Liebkind, 2001)。多数派やホスト社会の集団については意見が分かれる

- これらの方略は集団相互の態度という観点からはほとんど検討されていない

Zagefka & Brown(2002)

- 回答者：少数派集団と多数派集団が一緒に通うドイツの学校の生徒 321 名。
- 質問紙の回答から採用しやすい文化変容方略ごとに類型化された。
 - 統合はどちらの集団にも好まれた (少数派：75%；多数派：61%) が、同化を好むものは稀だった (両集団で 18%)
 - 周縁化は多数派の一部には好まれたが (19%)、少数派にはほとんど好まれなかった (2%)
 - 内集団バイアスの見られ方は所属集団、好まれる方略により異なった (図 12 参照)。統合を好む少数派、同化を好む多数派がもっともバイアスを示さなかった。

Zagefka, Brown, Broquard, and Leventoglu (2002)

- 回答者：ベルギーとトルコの多数派集団
- 統合 (48%) や同化 (ベルギー45%；トルコ 23%) がほぼ同様に好まれた。

Prafferott, and Brown (2004)

- 回答者：ドイツの田舎に住むホスト国と少数派 (主にトルコ人) の若者
- 少数派には統合が好まれ (85%)、多数派は統合 (45%) も同化 (45%) も好んだ。
- 多数派と少数派では好む文化変容方略に違いがある (Dovidio et al., 2000; Gonzalez and Brown, in press)。これが包括的な集団間接触モデルの構築を困難にしている。
- 文化や歴史的な背景は文化変容への態度を理解する上で重要であり、例えばアメリカ合衆国ひとつとっても、さまざまな方略が採用されている。

X. Toward an Integration (p. 317)

- 本節では、これまで蓄積された 40 以上の研究からモデルの各コンポーネントの進歩を評価し、この分野に多大な影響を与えてきた他の 3 つの選択肢との比較を行って、政治や教育への貢献をはかる

A. Intergroup Contact Theory: Progress and Priorities (p. 318)

- 統合モデルは①接触の次元、②集団の顕現性、③媒介要因の数々、④関係の一般化 の 4 つの要素からなっている (Hewstone, 1996; Hewstone & Brown, 1986; Vivian et al., 1997)
- Allport (1954) は集団間関係を改善する要素として①同等の地位、②協力的接触、③友人となる可能性、④権威のサポートをあげていた。著者らのモデルは Allport の①②④を重視し、③のかわりに集団の違いを相互に理解することの重要性を主張した
- 蓄積された多くの研究から、集団間の友情を育むような接触の重要 (Allport の③に近い) が指摘されてきた。これは接触の影響を調整する要因と強い関係をもつが、著者たちは集団間の友情はそれぞれの集団への所属を意識することと組み合わせられて影響することを主張

1. *Dimensions of Contact.* (接触の次元)

- ・ まず、実際の集団間接触を制約する、接触の機会を正確に測定することが重要(see also Pettigrew & Tropp, 2004; Wagner et al., 1989)。その次に接触の量と質(特に集団間の友情)を測定する複合的な項目を用意することが重要。これは後の接触の効果サイズの測定と強く関連してくる
- ・ 今後の研究では、集団間接触を二者間の関係からではなく、ネットワークという観点からとらえることが必要。
 - 社会学や政治学では、“弱い絆”や“橋渡しのキャピタル”が社会的資本として重要視
 - 接触が権力ある地位についている外集団メンバーへの態度に与える影響も検討すべき
 - 拡張的な接触は低い集団間不安、高い集団顕現性をもっているなので、集団間接触の準備をさせる方法として有効

2. *The Moderational Role of ‘Intergroup’ Contact.* (集団間接触の調整的な役割)

- ・ 著者たちはさまざまな方法で集団間の顕現性を操作してきた
 - 集団所属への気づき、集団間際への気づき、知覚された外集団メンバーの典型性、知覚された外集団均質性、これらの組み合わせ
 - もっとも信頼できる調整要因は、所属への気づきと知覚された典型性(e.g., Brown et al., 1999, 2001, 2004a; Gonzalez & Brown, 2001; Gonzalez et al., 2003a, b; Voci & Hewstone, 2004a)
 - 人々は相手の所属集団に気づかなければ個人と集団を結びつけないし、その結びつきは相手が集団の典型的な代表だと思わなければ強まらない
- ・ カテゴリーの顕現性は接触と結果の関係を調整し、個人を集団に一般化する傾向を強める(Gonzalez & Brown, 2001; Gonzalez et al., 2003a, b; Voci & Hewstone, 2003b, study 2; Voci & Hewstone, 2004)。しかし、顕現性はいつも必要とは限らない
 - Pettigrew and Tropp(2004)のメタ分析では、集団顕現性は調整要因に含まれていなかった。
 - 著者たちの分析では、カテゴリーの顕現性がほとんどの場合に接触効果を調整しており、接触と媒介要因、帰結の関係は接触時に顕現性が高い場合のみ見られるという仮説を支持する場合もあった(e.g., Brown et al., 1999, 2001; Harwood et al., in press; Hewstone et al., 2003)。
 - 著者たちはもともと一般化には集団の顕現性が高い接触が必要と考えていたが、その後の研究で、顕現性はある程度あれば十分で、高すぎる場合は集団間不安(緊張を高める)につながる(Hewstone, 1996, p. 33)と主張。

今後の研究で望まれること

- ・ 今後の研究では、顕現性の効果をより系統的に検討して、どの測度をもっとも接触効果を調整するのか、否定的な効果をもつのはいつかを明らかにすることが必要。
- ・ 接触状況のどのタイミングで顕現性を高めれば効果的なのかも検討する必要がある。
 - Van Oudenhoven et al., (1996)によると、顕現性は導入されるべきだが、導入段階では影響を及ぼさない。
 - しかし、顕現性が否定的な効果をもたらすと予想される場面では、タイミングや程度を考慮することが必要だろう(see also Wilder, 1993)
- ・ 一般化の問題をさらに検討していくことも必要。これまでに、集団の顕現性の高さが、個人からその個人が所属する集団への一般化、ターゲットの集団から他の外集団への一般化が促進されることがわかっているが、そのプロセスは未検討。知覚された類似性の効果が検討されているが(e.g., Voci & Hewston, 2004a; Maras & Brown, 1996)、その限界などは明らかになっていない。

3. *Mediation of Intergroup Contact Effects.* (集団間接触効果の媒介)

- 研究の初期には認知的な側面が重視され、ステレオタイプ変化の際の認知プロセスが検討されたが、その後は感情的な側面が注目されるようになり、不安、共感、視点取得、自己開示が検討されるようになった。好ましい接触はこれらの感情的な要素に影響を与え、集団間関係を改善する。
- 著者たちの研究によってさまざまな認知的・感情的媒介要因が検討された。
 - 感情的な側面では、ネガティブ感情の低減とポジティブ感情の増加の両方によって集団間関係が改善されることが示された。
 - 接触が直接的・拡張的なものに分けられ、それぞれの媒介要因が明らかになった。
- 媒介要因と調整要因の関係も検討され、調整要因が接触と媒介要因の関係にも影響を与えることがわかった。今後の研究では、それぞれの媒介要因のうち、どれが調整要因の影響を受けるのかを検討することが必要(e.g., Harwood et al., in press, study 2: Voci & Hewstone, 2000a, studies 1-3)。
- 共感(他者の感情を想像し感じる能力)の効果については更なる検討が必要。
 - Iyer, Leach, and Crosby (2003)は、注意の焦点に応じた共感の差異化を主張。自分を相手の立場に置くことは、個人的に気を悪くさせたり、外集団メンバーの感情に注目をさせる。
 - 共感は認知的な形式(e.g., Galinsky and Moskowitz, 2000)と感情的な形式(e.g., Batson et al., 1997)に分けられる。
 - これらの形式を区別した上での影響の検討なども必要
- 特定の集団間文脈に依拠した感情(たとえば集合的罪悪感)も今後の検討事項。
 - 集合的罪悪感は集団間系に影響する(e.g., Branscombe & Doosje, 2004)
 - 多数派が抱く集合的罪悪感は、長期にわたり差別を受けてきた少数派への補償行動につながる(Brown, Gonzalez, Zagefka, Manzi, & Saiz, 2004b; Doosje, Branscombe, Spears, & Manstead, 1998; Iyer et al., 2003)
 - 共感は集合的罪悪感にも影響するかもしれない

4. *Outcome Measures.* (結果測定)

- 著者たちはもともとステレオタイプの変化や外集団全体への態度の一般化を検討してきたが(e.g., Brown et al., 1999; Van Oudenhoven et al., 1996)、その後の研究でモデルがそれ以外の集団間関係の指標にもあてはめられることがわかった。
 - 接触は集団間感情、信頼、寛容を直接あるいは間接的に予測。最近では接触によって自集団と他集団の顔を区別する傾向が弱まることが見出されている(Walker & Hewstone, 2004a, b)
 - これらの結果はモデルが実用的であることを示している
- 最近では、間接的または暗黙的な集団間態度の指標を用いた検討が進められているが、媒介要因やさまざまな測度の検討はまだすすんでいない。
 - 最近では接触が“非人間化(infrahumanization; 外集団より内集団に人間的、二次的感情を帰属する傾向)”に影響することがわかっている(Leyens et al., 2000)。
- これまでの研究では態度を従属測度とする研究が多かったが、ステレオタイプを検討した研究の蓄積も望まれる(Tropp & Pettigrew, in press)。興味深いのは次の3つのテーマ
 - 接触状況の類型化。ステレオタイプ変化は態度変化よりも状況の質に制約されるものなのか
 - ステレオタイプ変容における感情的プロセスの検討。個人差や状況差を系統的に操作した検討が必要
 - ステレオタイプ変容の調整要因。Wolsko et al., (2003)は、ステレオタイプが集団の顕現性の調整を受けると主張している。
- 著者たちは最近、態度のさまざまな側面を測定した研究を行っている。

- 接触が態度の強さと態度のアクセシビリティに与える影響をはかる測度の開発 (Vonofakou et al., 2003)
- 研究での優先事項は、集団間接触と集団間態度の機能をよりしっかりと結びつけること。これは計画的な介入にとって重要

B. Theoretical Integration :..... (p. 326)

- ・ 冒頭では、著者たちのモデルは他のモデルと対立的に並べられていたが、これらは補完的な関係にあり、それぞれのモデルのもつ強みは統合することも可能 (see Hewstone, 1996; Miller, 2002)

Brewer-Miller モデルとの統合

- ・ 外集団との友好的な関係が外集団への態度の改善につながるという主張は、接触は個人的な相互作用という側面を最大にするよう組織すべきという Brewer-Miller の脱カテゴリー化モデルの主張と一貫する。
- ・ 自己開示が媒介要因として機能することも、脱カテゴリー化モデルの知見と一貫する。
- ・ 集団間の親密な関係を奨励することと、集団間の顕現性を維持することの関係は未解明
- ・ これまでの研究により、集団の顕現性が高い状況では、友情や自己開示といった対人的な要素が集団間にポジティブな影響をもたらすことがわかっている (Ensari & Miller, 2002)。
- ・ これまで著者たちは対人間行動と集団間行動を単極で考えていたが (Hewstone, 1996; Brown & Turner, 1981; Tajfel, 1978)、その考えは捨てて、Stephenson (1981) の主張するような二極的な考え方をする必要がある (図 1 3 参照)。
 - 集団間態度を改善するには、対人的要因 (友情)、集団的な要因 (顕現性) の両方が必要
 - 対人的要因があっても、集団的な要因がなければ態度の一般化は生じない
 - 集団的な要因があっても、対人的要因がなければ集団間不安が発生する
 - どちらの要因も欠けている場合には、態度変化を媒介するような感情は生じない
 - 二つの次元はわけられないという主張もあるが (Turner et al., 1987)、二次元にわたる考えの方が、研究の結果に一貫している。

Gaertner-Dovidio モデルとの統合

- ・ Gaertner たちが自ら著者たちのモデルとの統合を試みている。著者たちは、二重アイデンティティ戦略 (小集団のアイデンティティとより大きな集団のアイデンティティ両方の顕現性を高める) には、一般化を促進するという利点があることを付け加えられるにすぎない。
- ・ 二重アイデンティティ戦略はどちらかといえば少数派向き。
 - 内集団投影理論 (Mummendey & Wenzel, 1999) によると、多数派の抱く大きな集団のイメージは、現在の自分たち自身とほぼ一致するため、イメージをする必要を感じない可能性がある
 - 一方、少数派は自分たちの意見を大集団に一般化することが難しいため、二重アイデンティティを採用しやすい。
- ・ この問題は、多数派でも投影が困難であるような、より小規模で多元的な大集団を推奨することで解決できる (Waldzus, Mummendey, Wenzel, & Weber, 2003)。

- Pettigrew(1998)は特定の時間的な順序に各モデルを並べることで統合をはかっている
 - もっとも成功する方略は、集団がまえもって顕現性を最小化するように接触がデザインされている場合(Brewer-Miller)
 - サブグループのカテゴリーが顕現的になる(Hewstone-Brown)
 - そして、共通内集団アイデンティティが発展する(Gaertner-Dovidio)
 - この順序に従えば、集団間不安は低減されるし、集団をこえた友情が生まれ、ポジティブな態度が個人から集団に一般化され、より包括的なカテゴリーを手に入れることができる
 - しかし、これを実証的に検討した研究はまだ存在しない

応用的な視座

- 各モデルの共通点と相違点を明らかにすることは理論的な意義をもつが、これらの知見から、効果的な偏見低減の介入策を考えることも研究での優先事項
 - まず、自分のバックグラウンドを自覚し、その良さを認めることから始める
 - それに加えて、対人間の親密さを促進するような活動をする
 - “同じチームの違うグループ”(Gaertner & Dovidio, 2000)という感覚を促進するように環境を再構成する
- 対人的、集団的、共通集団的な要素をうまく組み合わせることができれば、集団間の緊張を和らげることができるだろう

C. Conclusions (p. 329)

- 本章では、1986年に著者たちが提唱した集団間接触のモデルを再検討し、関連研究をレビュー
- モデルの変更点は
 - 接触における集団間次元のみの強調から、集団間と対人間の次元の重視にシフト
 - さまざまな媒介要因の包括(特に感情的要素)。これらは集団顕現性に影響を受ける
 - 対立モデルの統合
- 1986年にモデルを提唱した時は、集団間接触のみに注目していたため、Brewer-Millerモデルと対立した。しかし、モデルの反証をあげていくことで、対人間、集団間の両方の要因を考慮した、統合的な理論を完成することができた。
- これまでの研究では、集団間接触が個人の偏見やそれ以外の社会心理学上の測度に影響することが示されてきた。しかし、集団間接触は社会的対立にもたらす影響は未検討。
 - 他分野の研究では、集団間接触は個人レベルには影響するが、集団レベルでは効果がないといわれている(Forbes, 1997)
- 対立の主観的要素は客観的要素がなくなっても長期にわたって維持されてしまう。それを越えて平和的に共存するためには、人々が抱いている内集団・外集団・集団間系への信念や感情を変えることが必要(Bar-Tal, 2000)。この観点からは、接触は衝突解決に貢献できる
- 接触理論や研究はパーフェクトとはいえないが、着実に進歩しており、実証的な検討が進んでいる。集団間接触がすべての集団間の衝突を解決できるわけではないが、各集団のメンバー同士が持続的にポジティブな接触持つことなしに集団間関係を改善することも、また困難である。